

ラブライブ！ it's
a show time! ～君の夢
が叶うのは～

あちやびん

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

—俺、西村啓。好きなもんはギター、あと歌—

μ'sのプロデューサーは、自称現役ミュージシャン!?

廃校の危機にある音ノ木坂学院に突如現れた転校生、西村啓（にしむら はじめ）。彼の正体は、プロデビュー間近のミュージシャンだった！

学校を廃校から救おうとする穂乃果と出会い、スクールアイドルグループ『μ's』が産声をあげる。

9人の歌の女神+1。2つが互いに支え合い、やがて大きな物語を紡いでいくことに

なる。

結成間もなく伝説となったスクールアイドルと、誰も語ることのなかった『もう一つのμ's』の

物語が、ここにある。

※主にアニメの話に沿って進行させていくので、大きなストーリー変化はありません。

また、場合によって会話が少なめになる場合もありますので、ご了承下さい。

目次

いつも通りのプロローグを、あなたへ

1

いつも通りのプロローグを、あなたへ

音ノ木坂学院、その校門前。

ひらひらと桜の花びらが舞い、学校へ集う生徒達を出迎え、祝福する。

と、思っていたのだが、当の学校内はそんなお祝いムードではないらしい。

音ノ木坂は今、廃校の危機にある。

生徒達はさぞかし落胆し、困惑してゐるだろう。

そんな風にこれから自分の母校になるであろう学校の事態をまるで他人事のように考えながら、

俺は校舎へ向かって歩いた。

「…へへっ」

「音ノ木坂？」

「そうそう、こないだ南さんからモデル生にならないかって言われて。家からも近いし、

いい更生の場になるんじゃない？」

「はあ？意味わからん」

高校2年になって間もない4月、母さんから持ちかけられた話。

音ノ木坂学院高等部共学化に伴う男子モデル生の募集、とまあ堅苦しいお知らせがうちに届いた。

もちろん俺はそんなのに興味なんか無い。

「別に今まで通りでいいんじゃない？この1年そうやってきたわけだし」

「ダメよ。さすがに1年は目を瞑ったけど、あんた高校生なのに学校もいかないで終わりにするつもり？」

家にもって音楽やるのもいいけど、せっかくだし青春を謳歌してみたら？」

どうでもいいわ。青春なんて、くっだら無い。

しかし、母さんの言うことも一理あるな。

俺は高校の最初の1年は通信教育で過ごした。

何故かって、学校が嫌いなんだ。いじめられたわけでも、非行で追い出されたわけでもない。

学校というコミュニティそのものが何となく気に食わない、ただそれだけ。

しかし、これからバイトだ就職だと大人の階段を否応無しに登らされる中で、高校3

年間通信教育でしたはさすがに通用しない。

家からも近いらしいし、どうするかな…

「ついに来ちまったなあ…」

気まずい。校舎に入る前から足が重くなる。

そもそも、共学化と言えど、女子校だ。

何でそんなところに男一人で放り出されなければならないのか。

どこかその辺のラノベや同人によくあるパターンだな。実に下らない。

そうやって今までは軽蔑していたが、いざ自分がそういう立場になると、焦ってしようがないな。

例えるなら、アメリカ第7艦隊に竹槍で挑む気分だ。ブルーどころじゃない。

「やるしかねえな…」

自分に鞭打ち、俺はついに学校へ足を踏み入れた―

HRの時間なのだろうか、生徒と一人も出くわすことなく理事長室まで来た。ヨッ

シャ!!

「失礼します」

「あら、西村君。久しぶりね」

部屋の奥の立派な机の向こうから、いかにも優しそうな女性が話しかけてきた。

「お、お久しぶり、ですか？」

「ふふつ、やっぱり覚えていないのも無理ないわね」

聞いた話、ここの理事長と母さんは同じ音ノ木坂出身で、同級生だったらしい。

俺がモデル生として招待されたのも2人の高校時代のよしみで、そもそも母さんが勝手に

理事長に推薦していたらしい。つまり、遅かれ早かれ俺はこの学校に行かなきゃいけないかったんだ。

救いはないんですか!?

「最後に会ったのなんて、西村君がまだ3歳ぐらいだった頃かしらね。あんなおとなしかったのに、ずいぶん変わったのねえ」

「え? ええと、そう、すか?」

くそお、会話が弾まない! 己のコミュ力のなさを嘆くぞ!

「まあ雑談は後にして、とりあえず手続きを済ませましようか」

手続きは割と簡単に済ませ、担任らしき先生に連れられてこれから自分の教室になる

であろうところへ向かう。

先生からは、女子ばかりだけどあまり緊張しなくていいぞ、とかこつちもクラスでなるべく受け入れやすい形をつくるよ、

とか言っていたが、俺は上の空で生返事をしながらぼんやり窓から外を眺める。

なんか、落ち着くなあ。よさげなりフが思いつきそうだ。

新曲のことをポーツと考えているうちに教室についた。

「みんな知ってると思うが、今日は転校生を紹介する。例の男子モデル生はこのクラスで引き受けることになった。」

みんな、それぞれ思うところはあるが、仲良くしてやってくれ」

教室内がわかりやすくざわめいている。マジで女子ばっかだ。当たり前だけど。

「さ、入ってこい」

はあ、なんか気だるいや。まあ適当にやるか。

俺はのほほんとした頭で、教室に入った。